

NEJIREBANE, No. 75, 15 Jun., 1997

フン虫地理学 --- 1. 奈良県のフン虫---

塚本珪一

〒606 京都市左京区修学院中林町 56

はじめに

1996年12月15日の日本甲虫学会総会で、後藤光男さんの奈良公園のフン虫地図をもっていますといった話を水野弘造さんにしているとき、横におられた林 靖彦さんが奈良公園の私たち(大阪甲虫同好会)の調査もありますと言われ、話が発展して、何らかの形でこれらのことを同氏ゆかりの『ねじればね』誌上に残しておこうということになった。

奈良県あるいは奈良公園のフン虫についての報告、記録は数多く、すべてを紹介出来ないが、その一部をもとにフン虫分布についての知見を述べ、奈良公園のフン虫に関する先覚者、故後藤光男氏の御厚意に対する小編としたい。

主な記録

谷 幸三(1966)、および大和昆虫愛好会『大和の昆虫』には谷 幸三、後藤光男・他(1966)の報告があり、54種のフン虫を記録している。大阪甲虫同好会の伊藤建夫・他(1994)は奈良公園で21種のフン虫についての詳細な調査を報告している。このデータは奈良公園におけるフン虫の通年の構造を示している貴重なものである。最近の分析法で解析すればフン虫構造を理論的に把握可能とするだろう。頭のなかでは多分こうなっているという推測を明確にしたデータである。谷 幸三(1975)「春日神社の報告」、後藤光男(1980)「奈良公園若草山の食糞コガネ」の知見があるが、1985年に後藤さんからいただいた地図と合わせてみるとよく解る。筆者はこの地図をたよりに保賀氏と三笠山でヒメコマグソコガネに出会ったのである。最近では京都府南部との比較として高橋 敏(1991)が奈良公園のフン虫41種を示している。保賀昭夫(1990)は近畿圏のオオセンチコガネについての分布を示している。筆者の最近の集

計では奈良県のフン虫は59種に達している(表1)。

奈良県のフン虫の特徴

奈良県の特産物としては *Aphodius naraensis* NAKANE ヒメコマグソコガネがあったが、中国・朝鮮半島・シベリアの *A. botulus* BALTHASAR と同じであることが解った。このフン虫は現在までのところ日本列島では奈良公園からしか報告されていない。

表1. 奈良県, 奈良公園のフン虫.

		奈良	1966	1970	1991
TROGIDAE	コブスジコガネ科				
<i>Trox niponensis</i> LEWIS	チビコブスジコガネ	●	●		
<i>Trox opacotuberculatus</i> MOTSCHULSKY	ヒメコブスジコガネ	●	●		
<i>Trox setifer</i> WATERHOUSE	アイヌコブスジコガネ	●			
<i>Omorgus chinensis</i> (BOHEMANN)	オオコブスジコガネ	●	●		
OCHODAEIDAE	アカマダラセンテコガネ科				
<i>Ochodaeus maculatus</i> WATERHOUSE	アカマダラセンテコガネ	●	●		
AEGIALIDAE	ニセマダソコガネ科				
<i>Caelius denticollis</i> LEWIS	トゲマダソコガネ	●	●		●
APHODIIDAE	マダソコガネ科				
<i>Aphodius quadratus</i> REICHE	オオマダソコガネ	●	●		○
<i>Aphodius brachysomus</i> SOLSKY	セマルオオマダソコガネ	●	●		○
<i>Aphodius troitzkyi</i> JACOBSON	マルツヤマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius hibernalis</i> (NAKANE et TSUKAMOTO)	クチキマダソコガネ	●	●		
<i>Aphodius yamato</i> NAKANE	クロツブマダソコガネ	●	●	○	●
<i>Aphodius rugosostriatus</i> WATERHOUSE	スジマダソコガネ	●	●	●	●
<i>Aphodius urostigma</i> HAROLD	フチケマダソコガネ	●	●	●	●
<i>Aphodius atratus</i> WATERHOUSE	クロツヤマダソコガネ	●	●	●	●
<i>Aphodius igai igai</i> NAKANE	イガクロツヤマダソコガネ	●	●		
<i>Aphodius superatrus</i> NOMURA et NAKANE	トゲクロツヤマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius unifasciatus</i> NOMURA et NAKANE	クロオビマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius maderi</i> BALTHASAR	クロヤマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius variabilis</i> WATERHOUSE	クロモンマダソコガネ	●	●		
<i>Aphodius ecoptus</i> BATES	ケブカマダソコガネ	●	●		○
<i>Aphodius isaburoi</i> NAKANE	チャクローマダソコガネ	●	●	○	●
<i>Aphodius mizo</i> NAKANE	ミゾムネマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius pallidilignis</i> WATERHOUSE	ネグロマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius pusillus</i> (HERBST)	コマグソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius botulus</i> BALTHASAR	ヒメコマグソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius nigrotessellatus</i> (MOTSCHULSKY)	セマダラマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius okadai</i> NAKANE	オビモンマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius rectus</i> (MOTSCHULSKY)	マダソコガネ	●	●	○	○
<i>Aphodius elegans</i> ALLIBERT	オオフクホシマダソコガネ	●	●		
<i>Aphodius sordidus</i> (FABRICIUS)	ヨツボシマダソコガネ	●	●		
<i>Aphodius brevisculus</i> MOTSCHULSKY	ヌバタマダソコガネ	●	○	●	
<i>Aphodius madara</i> NAKANE	マダラヒメスジマダソコガネ	●	●		
<i>Aphodius morii</i> NAKANE	ニセマキバマダソコガネ	●	●		
<i>Aphodius sublimbatus</i> (MOTSCHULSKY)	ウスイロマダソコガネ	●	●	●	●
<i>Aphodius uniplagiatus</i> WATERHOUSE	オビマダソコガネ	●	●	○	○
<i>Saprosites japonicus</i> WATERHOUSE	クロツツマダソコガネ	●	●	●	●
<i>Saprosites narae</i> LEWIS	ヒメツツマダソコガネ	●	●	●	●
<i>Myrnessus samurai</i> (BALTHASAR)	コケシマダソコガネ	●	●		
<i>Oxyomus ishidae</i> NAKANE	チドリムネミソマダソコガネ	●	●		
GEOTRUPIIDAE	センテコガネ科				
<i>Bolboceroma nigroplagiatum</i> (WATERHOUSE)	ムネアカセンテコガネ	●	●		
<i>Geotrupes auratus</i> (MOTSCHULSKY)	オオセンテコガネ	●	●	●	●
<i>Geotrupes laevistriatus</i> MOTSCHULSKY	センテコガネ	●	●	●	●
SCARABAEIDAE					
<i>Panelus parvulus</i> (WATERHOUSE)	マメダルマコガネ	●	●		●
<i>Copris acutidens</i> MOTSCHULSKY	ゴホンダイココガネ	●	●	●	●
<i>Copris pecuarius</i> LEWIS	ミヤマダイココガネ	●	●		
<i>Caccobius brevis</i> WATERHOUSE	ヒメコエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Caccobius jessoensis</i> HAROLD	マエカドコエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Caccobius nikkoensis</i> (LEWIS)	ニッコウコエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Caccobius suzukii</i> MATSUMURA	スズキコエンマコガネ	●	●		
<i>Caccobius unicornis</i> (FABRICIUS)	チビコエンマコガネ	●	●		
<i>Onthophagus japonicus</i> HAROLD	ヤマトエンマコガネ	●	●		○
<i>Onthophagus lenzii</i> HAROLD	カドマルエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Onthophagus nitidus</i> WATERHOUSE	ツヤエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Onthophagus ohbayashii</i> NOMURA	ナガスネエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Onthophagus atripennis</i> WATERHOUSE	コブマルエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Onthophagus viduus</i> HAROLD	マルエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Onthophagus ater</i> WATERHOUSE	クロマルエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Onthophagus fodiens</i> WATERHOUSE	フトカドエンマコガネ	●	●	●	●
<i>Liatogus minutus</i> MOTSCHULSKY	ツノコガネ	●	●		
		59	54	21	41

1966:後藤光男・土井仲治郎; 1970:大阪甲虫同好会調査(○春-秋出現タイプ, ●秋-春出現タイプ); 1991:高橋 敏(○文献).

A. yamato NAKANE クロツブマダソコガネは栃木・東京・神奈川・長野・滋賀・京都・三重・奈良; *A. okadai* NAKANE オビモンマダソコガネは滋賀・奈良・鳥根・広島; *A. pallidilignis* WATERHOUSE ネグロマダソコガネも奈良県以外では宮城・千葉・滋賀・大阪・長崎・鹿児島といった局所的な記録しかない。

A. madara NAKANE マダラヒメスジマダソコガネも青森・秋田・栃木・東京・神奈川・静岡・長野・山梨・滋賀に分布し、奈良県から西では記録がない。

A. morii NAKANE ニセマキバマダソコガネも秋田・栃木・東京・長野・三重・奈良・兵庫と局所的である。

Saprosites narae LEWIS ヒメツツマダソコガネは千葉・東京(三宅島)・静岡・奈良・鹿児島(奄美大島)・沖縄(沖縄本島)と意味ありげな記録である。

Caccobius nikkoensis (LEWIS) ニッコウコエンマコガネは宮城・栃木・神奈川・静岡・滋賀・京都・奈良・長崎(対馬)・鹿児島に記録がある。

Onthophagus japonicus HAROLD ヤマトエンマコガネは秋田・新潟(佐渡)・群馬・栃木・岐阜・滋賀・京都・兵庫・奈良に記録があるが、最近では奈良での記録を見ないという。しかし滋賀県では1996年の記録があるから絶滅したわけではない。このヤマトエンマコガネは黄色紋のあるエンマコガネであるが、きわめて類似している *O. trituber* WIEDMANN ミツコブエンマコガネが兵庫県南部河川敷に生息

している。鳥取県と岡山県の境に1941年の記録があって昔から日本列島にいたのだろう。是非黄色紋のあるエンマコガネをお持ちの方は再検討してどちらか教えていただきたい。

奈良公園とよく似た条件(多数の鹿が生息している)のところは北方では金華山、西方では巖島であるが、これら3箇所では、アカマダラセンチコガネ・ツヤマグソコガネ・オオセンチコガネ・センチコガネ・ゴホンダイコクコガネ・カドマルエンマコガネ・ツヤエンマコガネ・フトカドエンマコガネの8種が共通している。奈良と金華山は13種が共通し、巖島とはヒメコエンマコガネをはじめとして13種が共通している。

Geotrupes auratus (MOTSCHULSKY) オオセンチコガネの瑠璃色系が奈良公園から志摩半島、紀伊山地に分布し、緑色系が木津川北部から鈴鹿山脈に沿ったところに分布していることは有名である。屋久島の瑠璃色系の小型種などを含めて大澤省三先生らのミトコンドリアDNAで調査分析すれば面白いだろう。近畿圏のフン虫を比較したのが表2である。日本産の甲虫の由来についてはいろいろの表現があるが、少し無理はあるものの最も単純に大陸からの種、南方からの種、日本列島固有の種の3系に要約して示した。この表からは奈良と滋賀、大阪と兵庫、京都と三重がよく似たタイプであることが解る。この共通性を地図上で見るとなんとなく納得できるようである。他の甲虫群ではどうであろうか興味がつきない。

表 2. 近畿圏のフン虫比較

	奈良県	大阪府	和歌山	三重県	滋賀県	京都府	兵庫県
大陸系	3 2	2 6	2 4	2 7	2 0	2 5	3 0
南方系	5	7	6	6	3	6	7
固有種	2 2	1 3	1 1	1 7	1 5	1 5	1 3
種数	5 9	4 6	4 1	5 0	3 8	4 6	5 0

文献

- 谷 幸三(1966) 奈良公園の糞虫, *Nature Study*, 12(5): 37-43.
 谷 幸三(1966) 糞虫成虫個体群の生態学的研究, 大和の昆虫, 大和昆虫愛好会, No.3,4,XII: 3-10.
 後藤光男・土井仲治郎(1966) 奈良県の糞虫, 大和昆虫愛好会, No.3,4,XII: 36-47.
 谷 幸三(1975) 鹿糞を食べるコガネムシ, 昭和49年度春日大社内原生林調査報告: 36-44.
 後藤光男(1980) 奈良若草山の食糞性コガネの知見, *ねじればね*, 42: 1-3.
 高橋 敏(1991) 奈良公園の甲虫: 京都府南部の甲虫相との比較, 関西甲虫談話会資料第一号.
 保賀昭夫(1990) オオセンチコガネの仲間, 京都の昆虫, 京都新聞社.
 塚本珪一(1993) 日本糞虫記, 青土社.
 伊藤建夫・他(1994) 奈良公園の食糞性コガネムシ類について, 大阪甲虫同好会連絡誌, 10: 7-21.

(つかもとけいいち)

キベリハバビロオオキノコとチャバネチビオオキノコについて

生川展行

〒513 鈴鹿市木田町 2399

Tritoma pallidicincta (LEWIS) キベリハバビロオオキノコと *Tritoma tanigutii* CHŪJŌチャバネチビオオキノコは、両種の外部形態の類似性から、同一種であるかも知れないとの見解を持っていたが、最近までチャバネチビオオキノコの標本が集まらず、比較検討する機会がなかった。今回、斎藤琢巳、北山健司両氏より多数のチャバネチビオオキノコの標本を譲り受け、両種を比較検討した結果、

両種は別種であるとの確証を得た。同様の疑問を持たれていた方もあろうかと思うので、ここにその内容を報告しておく。

稿を草するにあたり、貴重な標本を恵与いただいた斎藤琢巳、北山健司、山地治の各位並びに、文献についてご配慮賜った九州大学の上野輝久氏に心よりお礼申し上げます。

1. 両種の概要について

(1) *Tritoma pallidicincta* (LEWIS, 1887) キベリハバビロオオキノコ



キベリハバビロオオキノコ

本種は、木曾福島で得られた2頭の標本で記載された種で、上翅肩部と側縁部のみが赤褐色からオレンジ色を呈しており、他種との区別は容易である。成虫は春に得られることが多く、以前は筆者も成虫は春のみ発生しているものと思っていたが、模式標本の産地と LEWIS の行動日程を照合すれば、木曾福島産の標本は7月下旬に採集されていることになり、調査を進めていくと、少数ながら夏から秋にも得られることが分かってきた。また沢田(1991)も「4月から8月にかけて成虫がみられる」と述べている。

成虫が集まるキノコとしては、CHÛJÔ(1969)はカイガラタケ、チャミダレアミタケ、チャカイガラタケ、ハチノスタケを、説田(1993)はエゴノキタケを、沢田(1991)はカイガラタケを記録している。

検視標本：5♂♂, 9♀♀, 三重県員弁郡藤原町河内谷, 4.V.1988, 生川展行採集。

(2) *Tritoma tanigutii* CHÛJÔ, 1940 チャバナネチビオオキノコ



チャバナネチビオオキノコ

本種は、大阪府箕面で得られた1頭により記載された種で、その後筆者が調べた範囲では、静岡県(杉本, 1991)、三重県(生川, 1987; 生川・乙部, 1990; 生川ほか, 1984; 中根, 1986)、福岡県(城戸, 1989)で記録されているに過ぎない。

なお、中根(1986)は本種を *Tritoma* 属から *Triprax* 属に移しているが、雄交尾器の形状から判断すると、*Tritoma* 属の方が妥当と考える。

成虫が食するキノコとしては、CHÛJÔ(1969)はニクハリタケ、アシグロタケを記録しているが、アシグロタケから得られた種は、*Tritoma rufipennis* (LEWIS) ベニバナネチビオオキノコの可能性が高い。

なお、今回斎藤氏からいただいた本種標本は、チャカイガラタケおよびエゴノキタケから得られたものである。本種は、和名のおり上翅が赤褐色を呈しており、色彩的にはベニバナネチビオオキノコと似ているが、頭部や下唇の形状(図3)から明瞭に区別さ

れる。

検視標本: 1♀, 岐阜県本巣郡根尾村日当, 7.IV.1990, 斎藤琢巳採集
 1♂, 6♀♀, 大阪府茨木市椿山, 16.III.1996, 斎藤琢巳採集
 2♂♂, 9♀♀, 同上, 18.V.1996, 北山健司採集
 2♂♂, 3♀♀, 大阪府箕面市下止々呂美, 18.V.1996, 斎藤琢巳採集
 1♂, 岡山県御津郡加茂川町宇甘溪, 2.V.1987, 山地 治採集

2. 両種の相違点について

オオキノコムシ科の甲虫は、外部形態の変化が乏しく両種についても例外ではないが、下記の相違点を見いだす事ができるので、上記両種を従来通り別種として扱い、その区別点を述べておく。

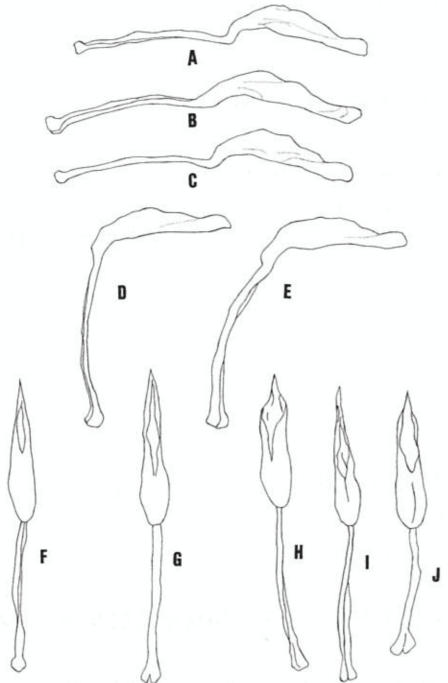


図1. キベリハバピロオオキノコ♂交尾器陰茎及支柱突起。
A-E: 左側面図； F-F: 上面図

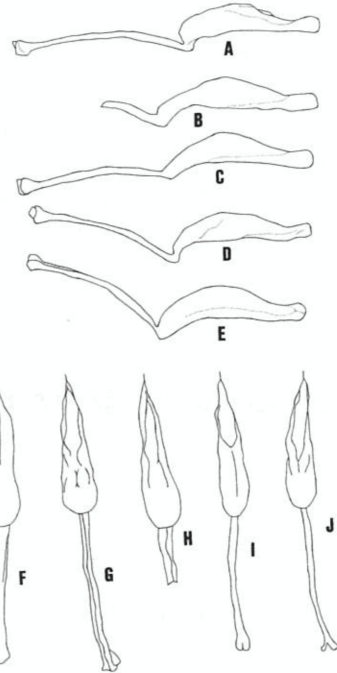


図2. チャバネチビオオキノコ♂交尾器陰茎及支柱突起。
A-E: 左側面図； F-F: 上面図

(1) 前胸背板側縁 (図3): チャバネチビオオキノコの前胸背板側縁は緩やかに弧を描いて前方へ狭まるが、キベリハバピロオオキノコの方は、強く弧を描きながら前方へ狭くなり、基部から約二分の一のところで更に内側へ狭くなる。前角はキベリハバピロオオキノコの方が前方へ張り出し、後縁中央部もキベリハバピロオオキノコの方がより後方へ張り出す。

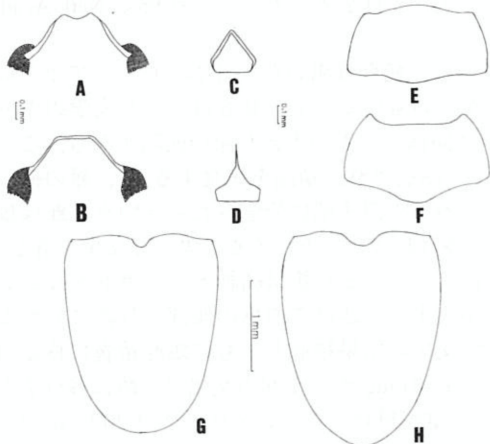


図3. ベニバネチビオオキノコ (A,C) ; チャバネチビオオキノコ (B,D,E & G) ; キベリハバピロオオキノコ (F,G).
A,B: 頭部； C,D: 下唇； E,F: 前胸背； G,H: 上翅。

(2) 上翅 (図3): キベリハバピロオオキノコの上翅長は幅の1.28倍、最大幅の位置は前縁から2.6/10のところ; チャバネチビオオキノコは長さは幅の1.42倍、最大幅位置は前縁から2.8/10のところである。

(3) 雄交尾器 (図1・2): チャバネチビオオキノコの雄交尾器陰茎側面上部は、滑らかに緩く弧を描いているが、キベリハバピロオオキノコは凹凸がある。また陰茎基部はチャバネチビオオキノコの方が太く、先端部はより鋭く突出している。

文献

CHŪJŌ, M., (1940). Description of two new Erotylid-beetles from Japan Proper. *Nippon-no-Kochu*, 3(2): 78-81, fig. 1-2.

----, (1969). *Fauna Japonica, Erotylidae*. 316pp., 23pls.

城戸克弥, (1989). 福岡県宗像市城山産鞘翅目録の追加 (13). 北九州の昆虫, 36 (3): 159-161.

- 倉敷昆虫館, (1978). 岡山県の昆虫. 岡山県昆虫生息調査報告書. 146pp.
- LEWIS, J., (1887). A list of fifty Erotylidae from Japan including thirty-five new species and four new genera. *Ann. Mag. Nat. Hist.*, [5] 20(115): 53-73.
- 中根猛彦, (1986). 日本産のオオキノコムシ科甲虫についての覚書. *北九州の昆虫*, 33(3): 131-135.
- 生川展行, (1987). 三重県内で得たオオキノコムシの記録. *ひらくら*, 31(1): 8-11.
- , (1990). 藤原岳北部で得たオオキノコムシ. *ひらくら*, 34(6): 155-159.
- ほか, (1984). 比奈知地域(三重県名張市)の甲虫相. 比奈知ダム周辺昆虫類調査報告書: 137-191.
- 野淵輝, (1952). 京都北山付近のオオキノコムシ. *昆虫の科学*, 1(1): 4-5.
- 沢田和宏, (1991). 神奈川県におけるキベリハバビロオオキノコムシの採集記録. *神奈川虫報*, (95): 20.
- 説田健一, (1993). 木材腐朽菌キノコの鞘翅目昆虫群集の組織と構造. *AKITU, Sup.1*: 1-21.
- 杉本可能, (1991). 静岡県産のオオキノコムシ科. *静岡の甲虫*, 9(1): 1-17.

(なるかわのぶゆき)

こうひ・ぶれいく (話のたね) - 1

アカハネムシの頭の穴の効用
高橋 敏

〒610-03 京都府綴喜郡井手町井手西高月60-101

アカハネムシ科のあるものの雄の頭頂に、複雑な凹陷構造があることを甲虫屋は御存知であろう。これはいったい何のためにあるか？

昆虫を材料とした生物学も、ミツバチを例とする行動学、ショウジョウバエの遺伝学ばかりでなく、最近では分子レベルの話題、例えばオサムシの分子分類学(大沢省三ら、オサムシニュースレター, No.1 - 10, 生命誌研究館)などが活発になっている。分子のてくる話といえばフェロモンや防御物質は昆虫を材料として始まった分野であって、現在も応用も含めて、その成果は著しい。カンタリジンはツチハンミョウ類の防御物質として古くから知られていた炭素数 10 個の低分子化合物だが、これがアカハネムシにも関係することがコーネル大学の T. EISNER (行動生理学) と、J. MEINWALD (有機化学) のグループによってわかった(アメリカ科学アカデミー紀要 *Proc. Natl. Acad. Sci. U. S. A.* (1996) 93, 6494, 6499)。

Neopyrochroa flabellata はアメリカに普通なアカハネムシ(翅鞘は黒いが、日本にだってアオグロアカハネという青いのやら黒いのやら赤いのやら判らないのもいる)で(私もコーネル大学のキャンパスで採集した)、雄頭頂には日本のムナビロアカハネ同様の、毛の生えた深い凹陷がある。この種は、驚いたことにはカンタリジンを食べるのだそうで(誘引され、結晶を摂食する!)、雄の摂ったカンタリジンは一部精巢の附属腺にいき、他が問題の頭部の凹陷部に分泌されるという。雌は雄の頭部にどれだけカンタリジンが分泌されているかで、多ければタノモシイ雄と思って交尾を許し、少ない、もしくは分泌していない雄はタヨリないと拒否する。つまり雄は結納としてカンタリジンを雌にプレゼントし、その量の多少で雄としての資格が決まる。雌はこの雄の頭部に分泌されたカンタリジンを摂食し、雄精巢附属腺中のカンタリジンが交尾の結果精液とともに雌貯精嚢に移ると併せて、1頭の雄が摂食した 70 mg のカンタリジンの中 40 mg が(1回の交尾で)雌に移行するという、さらにこの中の 13 mg が卵にはいるというから、雄が摂食したカンタリジンの 20% は卵にいく! 遺伝子以外、雄の子孫への物質の寄与は通常ないのに、なんと健気なアカハネムシの雄であることか。実際、テントウムシ科の *Coleomegilla maculata* 幼虫は雄の贈り物であるカンタリジンを含んだ卵の 60% は喰わなかった(含まない卵の 90% は喰われた)ので、カンタリジンは忌避物

質として有効であり、雄の労は報われていることになる。

カンタリジンは何処からくるのであろうか？ ツチハンミョウ類ではメバロン酸からのカンタリジン生合成が確立されているが、アカハネムシの場合、EISNER 達は外因性といっているだけである。アカハネムシはゲンセイを囓るのだろうか？

もの本によると、カンタリジンは催淫剤として用いられたとあるが、現在これは発癌プロモーター（それ自身としての発癌性はないが、発癌性物質と併用されると発癌性を高める物質）とされており、どうぞご注意を。

(たかはししょう)

ちょっと気になる甲虫の情報 (V)

下翅の退化したこの奇妙な甲虫は、カミキリともつかず、ゴミムシダマシともつかず、ヒョウホンムシともつかず、最近登場した四不像の甲虫の中でも最も注目を集める存在であろう。しかも成虫の出現期が冬期となると標本入手も汗と涙を伴わないではいられない。(水野)

ハネナシナガクチキムシ *Nipponomarolia kobensis* MIYATAKE, 1982

ハネナシナガクチキの採集方法について

生川展行

〒513 鈴鹿市木田町 2399

横関秀行

〒510-12 四日市市桜台 2-5-361

三重県の *Nipponomarolia kobensis* MIYATAKE ハネナシナガクチキについては、既に生川ほか(1995)、横関・生川(1996)により記録されているので、ここでは採集方法や経緯について述べてみたい。



ハネナシナガクチキ

ハネナシナガクチキは、全国的に記録の少ない種であるが、隣県の和歌山県では 2例が記録されたため、三重県でも採れる可能性は高いと思っていた。それまでの記録を調べると、数例が落葉下より獲られ、和歌山県の 2例のうち 1例は落葉下であり、落葉下より採集するのが一番確実ではないかと推定した。ただ三重県の場合、落葉下に生息している甲虫は、筆者の一人である横関や天春明吉、市橋 甫氏等により県内 1000 箇所以上にわたって調べられているにもかかわらず、本種は 1頭も採集されていなかったため、半ばあきらめの気分もあった。

ところが 1995年 1月の北勢地方の虫屋の月例会で、横関が尾鷲市三木崎の落葉下で採集した甲虫を生川が調べたところ、ハネナシナガクチキが 3頭も入っており、県下初の標本に非常に驚いた。その後、天春明吉氏も同所で 1頭を同様に採集し、計 4 頭になった。そこで是非とも追加固体を採集したいということで、1995年

2月11日に4人で三木崎へ出掛けた。ハネナシナガクチキが採集された場所は、三木崎のウバメガシ林(二次林)で、三重県南部の海岸沿いの林としては特に変わった環境ではない。ここでは陽の当たる林縁の枯れ枝の下の落葉より獲れたということで、重点的にそのような場所の落葉を大量に採取して帰ったが、結果は厳しく、追加できたのは1頭のみであった。その後、4月1日に5人で調査をおこない、1頭追加できたものの、5月3日および11月2日に延べ5人で調査を続行したが、追加はできなかった。さらに志摩半島以南の各地でも調査が行われたが、新産地としては今のところ、尾鷲市須賀利の1頭のみである。この間に採取して来た落葉は膨大な量で、捨て場所に困るほどであった。

水野弘造氏より、ハネナシナガクチキは成虫が冬に発生するのではないかとのご教示をいただいていたが、三重県では本種が獲れた時期は、まさしくそのとおりであった。今後調査が進めば、もっと効率のよい採集方法が見つかるかもしれないが、三重県での採集状況から、今までの採集方法を纏めると下記のとおりとなる。

1. 採集時期は12月から3月が良い。
2. 採集場所は、海岸沿いの照葉樹林(二次林でもよい)で、林縁等の陽のあたる場所の枯れ枝の下の落葉が良いが、菌類の生えている落葉は良くない。
3. 落葉は現地で5-10 mm メッシュの網でふるい、通気性の良い袋に入れて持ち帰り、抽出作業を行う。なお落葉は処理可能な量だけ持ち帰ること(欲張って採って来ると、処理できずに捨てることになる)。
4. 抽出方法は、採って来た落葉を少しづつピンセットでより分けたり、ベルレーゼやツルグレン装置にかけたりと様々な方法があるが、落葉を採って来てもその後の抽出を的確に行わないと、中途半端に終わってしまうことになるので、根気よく行う。

以上が採集方法の概略であるが、一番大切なのは数回行って採集できないからと諦めず、根気よく行うことである。先にも述べたが、三重県下でも1000箇所以上調査を行って、ようやく採集出来た訳で、まさに継続は力なりである。

冬の間は、ネットを使用しての一般的な採集法がシーズンオフになるため、落葉を採って来て甲虫を採集するのは、ハネナシナガクチキ以外にも他の採集法では得難い種々な種類のものが獲れるので、一度は試みてみる価値はあろう。

文献

的場 積.,(1992). ベルレーゼ法で採集した甲虫類 I. KINOKUNI, (42): 11.

生川展行ほか.,(1995). 三重県でハネナシナガクチキを採集. ひらくら, 39(3): 45.

横関秀行・生川展行.,(1996). 尾鷲市須賀利でハネナシナガクチキを採集. ひらくら, 40(6): 309.

(なるかわのぶゆき・よこぜきひでゆき)

ドウバネアナバケハネカクシの採集

高橋 徹

〒610-03 京都府綴喜郡井手町井手西高月60-101

Syntomium japonicum WATANABE et SHIBATA, 1960, ドウバネアナバケハネカクシは2 mm ほどの小さな種だが、採集例の少ないもの由である。

1ex. 京都府宇治市五雲峰 16. XII. 1995 筆者採集

宇治をとりまく低山のひとつの麓の小さな沢床の落ち葉をふるって得た。この時期、この環境に



ドウバネアナバケハネカクシ

多いヨツメハネカクシの類と違って、「硬派」の大変印象的な種であった。同じ Oxytelinae に属するものとしては、*Oxytelus takashii* ITO, 1994 が、同所付近の野生動物の糞から採れている (4. II. 1996)。

同定していただき、また発表の機会を与えてくださった伊藤建夫氏、写真を撮ってくださった斉藤琢巳氏に感謝の意を捧げる。

文献

WATANABE, Y. et Y. SHIBATA, 1960. Description of a new species of genus *Syntomium* in Japan (Col. Syaphylinidae). J. agr. Sci. Tokyo Nogyo Daigaku, 6(2): 103-105.

渡辺泰明, 1964. 新潟県産ハネカクシ科目録 (第一報). 新潟県の昆虫(VIII): 7-26.

KINOSHITA, S., 1972. Some remarkable species of Japanese Staphylinidae (Coleoptera).

Trans. shikoku ent. Soc., 11(3): 98

柴田泰利, 1986. 神奈川県産のハネカクシ. 神奈川虫報, (80): 1-9.

(たかはししょう)

虫屋の広場(4)

-- 虫屋のお宿-- その2 扉温泉群鷹館～早川さんのこと～

伊藤 昇

〒666-01 川西市東畦野 1-7-18

長野県松本市郊外にある入山辺の谷間を薄川沿いに車で 30 分程遡ると扉という所に着く。そこは旅館が 2 軒と最近できた公衆浴場が 1 軒だけの静かな山間の温泉地で、地元以外にはそれ程知られていないが、虫屋の間では大変有名なところで、信州へ採集に出掛ける人でここを訪れる人があとを絶たない。それは、当地が採集地として面白いだけでなく、ここにある温泉旅館”群鷹館”のご当主早川広文氏が「松本むしの会」を主催されている根っからの虫好きな方だからである。扉温泉へ採集に来た人は、たいいてい群鷹館を訪れるか或は宿泊して行き、採集ポイントをご教授いただいているようである。

私が扉温泉に初めて採集に行ったのはもう 25 年も前のことで、大阪近郊の低い山しか知らなかった私が小学生の時に八ヶ岳へ採集に行き、その雄大な山々と豊かな自然に魅せられ、大阪から遠くはなれた信州の学校を選んで入学した年である。その当時は一日に 3 往復しかバスはなく、終点まで乗っているのは私一人で、まるで大きなタクシーがわりのようなものであった。すでに早川さんのことは存じていたが、何故か足下を通り過ぎ、一人で採集していた。温泉の周辺は、その当時でもすでに案内書に書いてあるよりは開発されていたものの、鉢伏山へ続く溪谷や、ダムを越えて 30 分程川沿いに歩いた所は、鬱蒼とした原生林に囲まれたところで、初めて訪れた時には、*Pterostichus macrogenys* BATES, *Pterostichus uenoi* STRANEO, *Pterostichus katashinensis* HABU, *Pterostichus brittoni* HABU etc. 沢山のゴミムシを採集することができた。特に、*P. macrogenys* は、当時関西の虫屋にとっては珍しくまた人気のある虫の一つであり、嬉しく、たいへん感動したのを感じている。後になり扉はその種の多産地であることを早川さんから知らされたものである。比較的便利で自然がよく残っていたところなので、当地にはその後何度も訪れ、ゴミムシ以外にも *Carilia* sp., *Paranaspia anaspioides* (BATES), *Pachypidonia bodemeyeri* PIC, *Necydalis harmandi* PIC など比較的珍しいカミキリも採集した。扉温泉から山の斜面に刻まれた道を上ってゆくと扉峠にも出られ、

この峠からはピーナスラインが延び、美ヶ原や和田峠を經由して霧ヶ峰へ抜けられる。この峠はかつては *Pachyta erebia* BATES の多産地で、食堂のオバサンが『この頃はキベリカタビロを見なくなったなあ』と言っていたのには驚いた。相当大勢の採集者が毎年の様にキベリカタビロを狙って来ていたのであろう。今は舗装された道路、伐採それに排気ガスで見る影もなく、採れたという話も耳にしないが、それでも西側の斜面を中心にまだ原生林が残っていて *Necydalis* が採集出来るし、*Mesechthistatus fujisanus* HAYASHI が多産する。早川さんの話では、まだ寒い5月頃に峠付近の道端で *P. macrogenys* が結構採れるという。

ところで何度も採集に出かけたにも拘らず、早川さんと直接知り合ったのは割合最近のことで、数年前に早川さんらが長野県のゴミムシのリストを作るために、知人のKさんにゴミムシを手掛けている人の紹介を依頼されたのがきっかけである。早川さんより同定依頼の葉書をいただいたとき、交流が始まった。それ以来、早川さんのもとに集まっておられる大勢の同好諸氏の多数のゴミムシの標本が、送られてくるようになった。そんないきさつで、お盆の帰省(妻の実家が信州)の折りに2度ほど伺った。今はバスが扉まで運行していないので、車のない私は途中の大和合というところ



屏温泉群鷹館

から1時間弱の道程を歩いて行く。早川さんは、信州の人によくみられる生真面目な方で、関西人のように下らない冗談やおべんちゃらは決して口にされませんが、話すことはお好きで、虫の話に花が咲き、私も懐かしさが手伝ってついつい時間が経つのを忘れてしまう。

早川さんの標本は、ゴミムシを見せていただいたが、ミズギワゴミムシのような小型のものやゴモクムシの様な冴えないゴミムシまでも丁寧に整理されており、几帳面な性格と虫に対する情熱が伺え、虫に対する熱心な姿勢には感服させられる。また最近体調が思わし

くないにも拘らず、丹念に採集され、トラップも常にかけておられ、その後も標本をよく送ってこられる。調べる方にも注力されており、地味な *Synuchus* の同定ポイントについても熱心に質問される。そしてご病気がちにも拘らずこの2年間に長野県のゴミムシ・リスト2編を完成された。また知人のIさん(ハネカクシ屋)に群鷹館を紹介し、Iさんが採集をかねて泊まってからは、地味なハネカクシも採集されるようになったようである。

最近の入退院を繰り返されておられると聞かすが、いつまでも長野県の虫屋の中心的人方として活躍されることを、早川さんを知るもの一人として願ってやまない。

(いとうのぼる)

会報

9月例会記録(1996年)

会員相互の親睦をはかるため、再開第一回の例会が9月29日(日)午前10時から大阪市立自然史博物館において開催された。午前中は大会と同様に自由懇談と同定会に当てられた。

午後1時から、林会長より会務報告(会務分担・今後の運営等)が行われた後、伊藤建夫氏の

『モンゴルの昆虫と自然』と題する講演がスライドによる説明と標本の回覧により行われた。モンゴルは草原の国という印象が強いが、谷間にはシラカバやヤナギの類の林もあり、花ではハナカミキリ、草原の石の下にはゴミムシやハネカクシも多数いて、興味深かった。

最後に出席会員より夏の採集結果等をまじえて自己紹介が行われ、和やかな雰囲気の中に閉会した。当初心配された参加者数も20名以上に達し、再開第一回目としては順調なスタートとなった。当日の出席者は下記の通り(敬称略)。

畑 守国・畑山武一郎・林 匡夫・林 靖彦・伊藤 昇・伊藤建夫・北山 昭・松田 厚・水野弘造
三木三徳・望月寛人・野村英世・大石久志・斎藤琢巳・澤田高平・佐々治寛之・初宿成彦・高羽正治
田中昭太郎・八木正道・山下 晶・吉川正彦・吉田元重

(野村英世)

会計報告

1996年(平成8年)の収支状況を報告します。本会の収支は長年に亘り赤字基調が続いていましたが、昨年の単年度収支では黒字となりました。これは収支面でパソコン導入による編集で印刷費が大幅に減少した事、収入面で未納の年会費が順調に納入された事と新規入会者の増加と賛助会員(穂積俊文氏)のご支援に依るものです。その結果、次年度繰越不足金も半減し、収支状況の改善が進んでいます。今後とも会員の皆様のご助力をお願いします。(野村英世)

1996年度(平成8年度)収支決算書 (自 96年 1月 1日 至 96年12月31日)

収入の部		支出の部	
会費	1,612,000	印刷代*	1,571,780
バックナンバー代	190,500	通信費**	306,270
別刷代 (含印刷実費負担金)	254,450	消耗品代***	63,099
雑収入	305,111	大会費	14,935
次年度繰越不足金	428,336	幹事会費	6,390
		雑費	0
		前年度繰越不足金	827,923
計	2,790,397	計	2,790,397

* 50巻2号, 51巻1号および『ねじればね』の印刷代

** 50巻2号, 51巻1・2号の発送費用および例会・大会の案内の通信費

*** 会員カード・振替用紙の印刷代

発行: 1997.6.15 日本甲虫学会

〒558 大阪市住吉区菟田2-16-5 レジデンス寿202 林 匡夫

Tel: (06) 698-2964 振替口座: 00990-8-39672

ねじればね原稿送付先

〒611 宇治市木幡熊小路19-35 水野弘造 Tel 0774-32-4929

〒614 八幡市男山雄徳8 E7-303 伊藤建夫 Tel (Fax) 075-983-3491